

## 学位論文内容の要旨

論文提出者	小林 倫也
論文審査委員	(主査) 朝日大学歯学部 教授 裕 哲崇 (副査) 朝日大学歯学部 教授 山内六男 (副査) 朝日大学歯学部 教授 式守道夫
論文題目	咬合異常に基づく不快感を簡便かつ客観的に測定する心理生理学的指標の検討
<p><u>論文内容の要旨</u></p> <p>一般歯科診療において、患者が咬合異常にもとづく不快感を訴える場面は少なくない。この場合、術者としては患者の訴えに基づき咬合調整を行うのが通法であるが、この訴えそのものが主観に基づくものであり、咬合調整手法も術者の経験に頼っているのが実情である。本論文は、このような不快感の評定に、なんらかの客観的なエビデンスを与えること、さらには、咬合異常による不快感の評定や咬合治療の診査にチェアサイドでも簡便に利用できる手法がないかどうかを検討したものである。実際に検討した指標は、基礎心理学的指標として、状態-特性不安検査 (State-Trait Anxiety Inventory-Form Y: STAI)、違和感の評定および噛む力の評定 (Visual analogue scale: VAS)、基礎生理学的指標として、咀嚼能率、咀嚼時間 (手計測)、筋電図学的咀嚼時間、習慣性咀嚼側最大筋力、習慣性咀嚼側総筋放電量、全唾液アミラーゼ濃度、Galvanic Skin Reflex (GSR) 積分量の10コのパラメーターであり、これらについて、以下の比較実験を行った。</p> <p>実験1：正常咬合群と異常咬合群での群間比較</p> <p>正常咬合群 (n=65) と異常咬合群 (n=32) の2群の被験者に対して、前述の各指標を通法により測定し、比較検討した。群分けは、沖山ら (1996) の方法をアレンジし、臨床経験6年以上の3名の歯科医師全員の診査結果が一致したもののみをデータとして採用した。その結果、STAI、違和感および噛む力に対する主観的評定値、唾液アミラーゼ濃度、習慣性咀嚼側総筋放電量について、正常咬合群と異常咬合群で有意な差を検出した (wilcoxonの片側検定; <math>p &lt; 0.05</math>)。また、STAIの結果は、違和感および噛む力に対する主観的評定値と有意な相関 (Pearsonの相関係数、t-test; <math>p &lt; 0.01</math>) を示すなど、いくつかの相関関係を見つけた。</p>	

実験 2 : 咬合異常を主訴として来院した被験者の初診時と最終治療後での比較

咬合の異常による不快感を主訴として来院した患者 (n=32) の初診時と最終治療終了後に前述の指標を通法により測定し、治療により同一被験者内での変化が見られるか否かを比較検討した。その結果、STAI、違和感および噛む力に対する主観的評定値、咀嚼時間 (手計測)、習慣性咀嚼側総筋放電量、咀嚼中GSR積分量に有意な差を検出した (paired t-test;  $p < 0.05$ )。

これらの結果から、咬合異常の評価および咬合治療の評価にSTAIを初めとした各種基礎心理学的および生理学的指標が使用可能である可能性を明らかとした。特に、チェアサイドでの簡便な使用という点からは、心理学的手法が高精度であり、有意義であることを明らかとした。